

伴う遺跡有無確認のため、一二月に確認され、ほぼ連続するように面的な調査を行なった。検出された遺構は、東西にならぶ三つのピット群と、これの北に東西に流れる自然地形の谷を利用した池（池1）、東ピット群の東で同じく自然地形を利用してつくられた池（池2）

奈良・白毫寺遺跡

- 1 所在地 奈良県奈良市白毫寺町
- 2 調査期間 一九八二年(昭57)二月～七月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 発掘担当者 中井一夫・関川尚功・千賀久・井上義光
- 5 遺跡の種類 庭園跡
- 6 遺跡の時代 奈良～平安前期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

池1の谷と中央。ヒット群の間で検出された泉水的な石組をもつ井戸と、これから流れ出る水を北側の谷へ導く溝1がある。

三つのピット群のうち、西群は盛土されるためその存在が確認されたのみで調査は行なえず、試掘結果からでは建物の存在は確認されてはいない。中央群では、多数のピットの中で三棟の掘立柱建物が確認でき、東群では二棟が確認できた。東群の一棟は周辺に奈良時代の遺物が多かったこと、中央群の一棟は付属するようになかたちで存在した土壌内より奈良時代の遺物が検出されたことより、これら二棟は奈良時代の建物であろうと考えられるが、他は時代を決定する資料にめぐまれなかった。建物の主軸の方向はすべてまちまちで、糸里に一致するものは東群の奈良時代の建物一棟のみである。

池1・2の堤はなくなっていたが、水を流し出すための暗渠が残っていた。池1は池底が二段になっており、上段は庭園としての機能をもっていたようで、汀線沿いに庭石的な石を配したり、池底に石敷がなされていた。水の取入口にはほとんど施設的なものはみられなかったが、やや大形の石が乱雑に投げ込まれていた。これらの石の間にも遺物があり、後述する木簡(2)・(3)や奈良時代の遺物もこの石群の先端あたりより出土したので、構築時の姿がどのようなものであったのかは不明である。池の最終堆積土中からは、多数の平安時代前半期の遺物が出土しており、この中には木簡(3)と斎串多数・下駄等の木製品も含まれていた。池の下流部の谷の南岸には、大

形の礎を積んだ石組がみられた。この谷内の下層からは、奈良時代の遺物が出土している。主なものは、小型の銅鏡・和同開珎・鬼瓦等がある。中央ビット群と谷の間で検出された井戸は、その石組から大きく三時期に分けることができる。第一期は、掘形中央に大きな石を立てならべて水の流れ出る西側の一部を開けているが、この石の中でも北側のものが最も大きく立派で、南側に存在する建物からみると正面にあたるものである。第二期は、この石の一部をおおうようにつくられた石敷で、井戸の東上3が埋められる時期である。第三期は、この井戸がまったく埋没してしまった後、石敷の一部を破壊して掘られた素掘の井戸で、本来のものとまったく無関係であろう。第一期と第二期の間にどのくらいの時間的経過があったかは、試掘時の調査がやや雑であったためくわしい検討を加えねばならないので、ここでは不明とせざるを得ないが、第一期の最終時には、この井戸は植物遺体を多く含む黒色の有機質土におおわれており、この層中より木簡(1)が出土した。またこの層中からは、奈良時代の土器と共に斎串数点も出土している。

池2の遺物は少なかったが、時期的には池1とそれほどかわらず、池中央につくられた石組の浅い井戸(?)内より斎串も出土している。

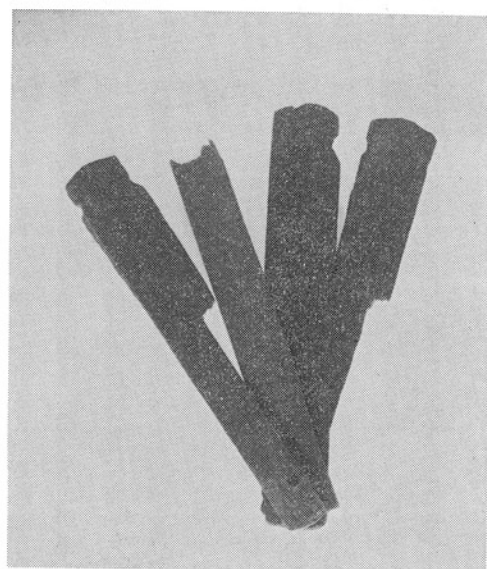
8 木簡の釈文・内容

- (1) 〔天平五年閏月廿六日白〕合 (196)×(18)×3 033
 (2) ×□□□□□□□□ (142)×(13)×3 081

(3) 墨書なし

- ① 170×28×4
 ② 171×(23)×5
 ③ 155×(20)×4
 ④ 166×26×5

①～④とも下部に径二mmの穴があけられており、これに長さ一八mmの竹ヒゴが通って四枚が扇状に開くようになっていた。各札とも表裏の区別はつけやすく、四枚を重ねた場合、一番上面にくるものについては上部の袂りに紐をかけてたばね、後その中央でこれを止めたための傷がついている。(中井一夫)



木簡(3)